

## 小規模博物館学芸員の業務内容の実際 —穂別町立博物館における 1998-1999 年度の実例—

The reality of the work of “GAKUGEI-IN” in a small museum  
- A case study of Hobetsu Museum between 1998 and 1999 -

櫻井和彦

Kazuhiko SAKURAI

穂別町立博物館, 北海道勇払郡穂別町穂別

*Hobetsu Museum, Hobetsu, Yufutsu-gun, Hokkaido, 054-0211 Japan*

### Abstract

Hobetsu Museum is a small museum in Hobetsu, central Hokkaido, Japan. It introduces a large collection of marine vertebrate and molluscan fossils, and explains the geological history of Hobetsu and the surrounding areas.

In 1998, this museum has two “GAKUGEI-IN” (Japanese name for a curator), but in 1999, there was only one. An investigation into the work of GAKUGEI-IN revealed that the majority of time was spent on “Popularizations and Educations” in 1999.

Small museums have many limitations, and therefore need to restrict the sphere of their activities. I think it is more desirable for Hobetsu museum to continue to pursue its activities based on the fossils found in the area, and concentrate on further academic exchange with scientists worldwide. Moreover, I hope people in this area will become more attached to Hobetsu Museum than they are now.

Key words- Hobetsu Museum, GAKUGEI-IN, small museum, museum activities

(2000 年 3 月 3 日受付)

### はじめに

穂別町立博物館は、北海道中央部に位置する穂別町(人口 4,059 人, 2000 年 3 月 1 月現在)が設置主体の「小規模」な博物館である。

北海道の中軸をなす日高山脈の西側に位置する穂別町およびその近隣地域には白亜系海成層が露出し、海棲脊椎動物化石や海棲軟体動物化石を豊富に産出することで古くから知られてきた。

1977(昭和 52)年、地元の化石愛好家によって町内から採取された動物化石が長頸竜化石の一部であることが判明し、同年の発掘調査によって、胴体の大部分を含む長頸竜化石が発見された。この長頸竜化石(HMG-1, 通称「ホベツアラキリュウ」)の全身復原骨格を目玉として 1982(昭和 57)年に開

館したのが、穂別町立博物館である。開館当時は自然史系資料(穂別町の地質と生物の進化)と人文系資料(開拓の歴史、昔の農機具等)の双方を展示する総合博物館であったが、1992(平成 4)年の展示更新に伴い、町内から産出する動物化石を中心とした自然史博物館に転換、北海道内でも数少ない古生物専門の博物館として現在に至っている。

しかし、1998 年度から 1999 年度にかけて学芸部門の体制が変更となり、その活動内容も変更を余儀なくされた。本報告では、穂別町立博物館の活動内容および学芸員の業務内容をその 2 か年について比較、検討することを通じて、小規模博物館における学芸員の業務内容の実態および抱える問題点を明らかにし、今後の博物館活動の方向性を模索することを目的とした。

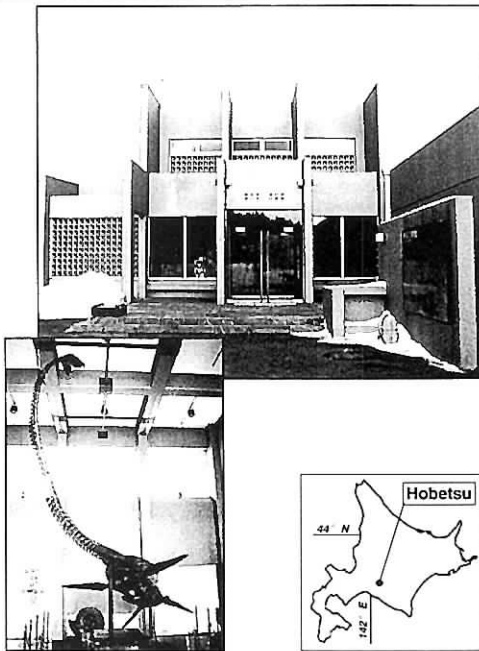


図1 穂別町立博物館の外観  
穂別町の位置（右下）と外観（上）。  
入口ホールの長頸竜化石（HMG-1）の全身  
復原骨格（左下）。

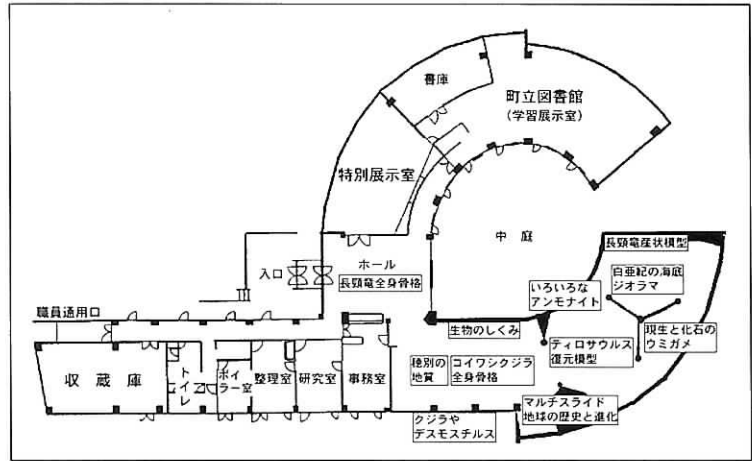


図2 穂別町立博物館（平面図）

建物は、鉄筋コンクリート平屋建。□は展示資料を示す。特別展示室は、ホールをはさんで常設展示室の反対側に位置する。なお、全体の形状はアンモナイトと長頸竜をイメージしているらしい。

地理的条件	所在地：北海道勇払郡穂別町字穂別 80 - 6 穂別町は、北海道中軸部に位置。行政区画は胆振管内。面積 546.48km <sup>2</sup> （うち、89%は森林面積）、人口 4,059 人。近隣主要都市は、札幌市（車で約 2 時間）、千歳市（同約 1 時間）、苫小牧市（同約 1 時間）、日高町（同約 40 分）。博物館は穂別町のほぼ中央にある市街地に位置し、国道 274 号から道道を南下、約 15 分。
地質的条件	穂別町には、北海道中軸部南部の日高山脈西側に発達する標準的な地質層序が一通り見られる（詳細は高橋・和田、1985 を参照）。そのうち、中生代白亜紀後期の蝦夷累層群からは、海棲爬虫類化石および海棲軟体動物化石を豊富に産出する。
構造規模	建築構造：鉄筋コンクリート平屋建 建築面積：1,100m <sup>2</sup> （うち、常設展示室：372.88m <sup>2</sup> 、特別展示室：99.08m <sup>2</sup> 、収蔵庫：86.56m <sup>2</sup> ）
博物館の特徴	穂別町内から産出する動物化石（主として、中生代白亜紀後期の海棲爬虫類化石および海棲軟体動物化石）を中心として、穂別地域の地史を紹介する自然史博物館。
設置主体	穂別町
運営体制	穂別町教育委員会に所属。 職員は、館長（併任）、一般職員 1 名（事務担当）、学芸員 1 名、臨時職員 4 名（学芸補助：1 名、窓口業務：2 名、清掃：1 名）。学芸部門は学芸員 1 名（著者）と学芸補助 1 名（野外調査の随行、普及行事の補助、化石削出作業に従事）。
学芸員の処遇	行政職給与表が適用。技術吏員。教育委員会所属（博物館勤務）。
学芸員の業務範囲	主として、資料収集（野外調査）、資料の保管、化石の研究、常設展示の管理、特別展の企画・実施、普及行事の企画・実施、「穂別町立博物館研究報告」の発行、博物館広報紙の発行、その他学術分野に関する業務全般。 窓口業務は、通常は臨時職員（窓口担当の 2 名のうちどちらか）および一般職員（事務担当）で対応し、学芸員は繁忙期（5 月の大型連休や夏休み時期）もしくは一般職員が窓口業務に従事できない場合に臨時に担当する。また、普及行事以外の日常的な来館者の対応（展示室の案内など）は常時ではなく、要求に応じて行っている。また、必要に応じて施設管理（冬季の除雪、展示室の補修・維持管理等）も行う。

表 1 穂別町立博物館の概要

穂別町立博物館の概要。町人口および運営体制は 2000 年 3 月 1 日現在。

## I. 穂別町立博物館の概要と活動内容

### 1. 穂別町立博物館の概要

穂別町立博物館は、北海道中軸部に位置する穂別町の市街地にある。設置主体は穂別町。

穂別町およびその周辺地域には、中生代白亜紀後期の蝦夷累層群が露出し（詳細は高橋・和田、1985 を参照）、海棲爬虫類化石および海棲軟体動物化石を豊富に産出する。当館は、これら町内から産出した化石を中心として、穂別地域の地史を紹介する自

然史博物館である。（博物館の外観は図 1、館内の平面図は図 2、博物館の概要は表 1、設立の経緯は表 2 を参照。）

### 2. 穂別町立博物館の活動

ここでは、地徳（1995b）に従い、博物館活動を「調査・研究」、「収集・保存」、「普及・教育」の三大要素に区分し、その他、学芸員の研究成果の公表の機会および研修の機会である「学会・研修」、館

年 月	出来事
1975 (昭和 50) 年 6 月	町内の化石愛好家が町内の白亜系分布域より、骨化石を発見。
1977 (昭和 52) 年 2 月	骨化石は長頸竜のものであると判明。
1977 (昭和 52) 年 7 月 5-8 日	発掘調査団が結成され、採集地点において発掘調査を実施、長頸竜の胴体部分を発見。
1978 (昭和 53) 年 11 月	長頸竜化石の保管、削出作業のために「穂別町立郷土資料館」が開館。
1981 (昭和 56) 年 3 月	施設の名称を「穂別町立博物館」に変更。
1982 (昭和 57) 年 7 月 20 日	博物館の開館。入口ホールの長頸竜全身復原骨格 (国内 2 番目) を目玉とし、穂別町の地質と生物の進化、開拓の歴史資料を展示する総合博物館を目指す。
1983 (昭和 58) 年 3 月	博物館法による登録博物館に指定 (北博登第 28 号)。
1992 (平成 4) 年 4 月	展示更新に伴い、町内から産出する動物化石を中心とした自然史系博物館に転換。
1994 (平成 6) 年 4 月 1 日	学芸員 2 名体制となる (地徳・元学芸員、川上・元学芸員)。
1999 (平成 11) 年 4 月 1 日	学芸員 1 名体制となる (櫻井・現学芸員)。
1999 (平成 11) 年 5 月 29 日	入館者数 30 万人突破。
～現在	

表 2 穂別町立博物館の設立の経緯

設立のきっかけとなった骨化石の発見から現在までの概略。

長頸竜化石の発見から博物館設立に至る経緯に関しては、村上 (1983) で詳しく述べられている。

大分類	中分類	内 容
調査・研究	-	穂別地域に関係する化石・地質の研究、外部から依頼された研究、さらに、「収集・保存」や「普及・保存」のための調査や研究。
収集・保存	収集	主として、穂別地域から産出する化石の採集 (野外調査)。
	保存	資料の受入・登録、管理 (資料整理、収蔵資料閲覧の対応等)
普及・教育	常設展示	常設展示への資料の追加・入換、解説パネルの作成等。
	特別展	特別展の企画・準備・実施。基本的に、収蔵資料を題材とする。
	普及事業	展示案内、化石採集会、化石削出の指導、地質見学会、講演会、博物館めぐりツアー (1999 年度に初めて実施)、来館者の対応など。
	広報活動	博物館広報紙の発行 (月刊)、マスコミの対応 (取材・問合せ) 等。
学会・研修	学 会	日本地質学会 (学術大会)
	研 修	北海道博物館協会 (学芸部会研修会)、日胆地区博物館等連絡協議会 (研修会)、化石サミット、他館の見学、その他の研修会・シンポジウム等。
その他業務	館内業務	施設管理 (冬季の除雪、展示室や博物館施設自体の補修等)、事務部門との打ち合わせ、窓口業務、研究報告・博物館報の作成・発送、博物館実習生受入等。
	一般職業務	教育委員会事務局会議、公務員研修等。

表 3 穂別町立博物館学芸員の業務分野の内訳

ここでは、博物館活動を地徳 (1995b) に従い、「調査・研究」、「収集・保存」、「普及・教育」に区分した。その他「学会・研修」、「その他業務」の区分に関しては、本文を参照。

内の施設管理やその他事務作業などの「その他業務」に大別して扱う (各活動分野の内容に関しては、表 3 を参照)。

#### A. 調査・研究

地徳 (1995b) によれば、収集した資料に関する「調査・研究」のみならず、資料を「収集・保存」するための「調査・研究」、展示した資料 (常設展示) が来館者にとってどのように理解されたかという「調査・研究」などを含む。

##### (1) 収集した資料に関する「調査・研究」

収集した資料については、時間的・人的な制約などから当館の学芸員が自ら研究できるとは限らず、実際のところ、外部の研究者によるものも多いのが現状である。また、学芸員の得意とする分野に限り、外部からの研究依頼を引き受ける場合もある。これまで行われてきた主要な「調査・研究」に関しては、表 4 を参照。

※外部からの研究依頼：外部から研究を依頼されるのは、基本的に、穂別町と地質学的に関わりの深い近隣地域、また他地域で町内から産出するものと同様な化石が産出した場合である。この場合、学問の発展への寄与という面、博物館 (または、相当施設)

との相互協力という面、また、当館にとっても有用な情報・知識の増加につながるという面から、研究を引き受ける場合がある。

##### (2) その他の「調査・研究」

化石レプリカの作成方法 (仲谷・久家, 1984)、資料の登録について (地徳, 1989)、博物館活動や学芸員の業務について (地徳, 1995a, b) などがある。言うまでもなく、本論もその 1 つである。

##### (3) 「穂別町立博物館研究報告」の発行

当館学芸員による「調査・研究」および外部の研究者から投稿された論文を、「穂別町立博物館研究報告」として年度末に発行する。掲載論文の内容は、原則として、化石や地質など何らかの点で穂別地域に関わりのある内容、博物館活動に関する内容、一般的な地質現象に関する内容、地質学関連のデータベースに関する内容などに限定している。1984 年に創刊以降、2000 年 (第 16 号) までに 65 編の研究論文を掲載している (1988 年は休刊)。そのうち、化石・地質が 48 編 (全体の 73.8%) を占める。また、外部の研究者からの投稿が 42 編 (全体の 64.6%) である (図 3)。

種類	研究者	対象	備考
穂別町立博物館学芸員による研究	鈴木 茂	モササウルス類ほか	在職期間 1981-1985
	地徳 力	モササウルス類ほか	在職期間 1985-1999
	川上 源太郎	穂別地域の地質	在職期間 1994-1998
	櫻井 和彦	モササウルス類	在職期間 1998-
外部研究者による研究	仲谷 英夫	長頸竜	香川大学
	箕浦 名知男	長頸竜ほか	北海道大学総合博物館
	平山 廉	ウミガメ, リクガメ	帝京平成大学
	木村 方一	デスマスチルス, クジラ	北海道教育大学札幌校
	一島 啓人	クジラ	New Zealand, Otago Univ.大学院(当時)
	久家 直之	サメ	ジオサイエンス株式会社(当時)
	松本 達郎	アンモナイト	九州大学
	野田 雅之	イノセラムス	大分市深河内
	利光 誠一	イノセラムス, 生痕化石	地質調査所地質標本館
依頼された研究	-	展示資料に関する研究(化石の同定)	日高山脈館*より依頼(1998年度)
	-	日高町から産出した動物化石に関する研究	日高山脈館*より依頼(1999年度)

表4 穂別町立博物館の調査・研究活動

主として大型動物化石に限定して紹介。登録資料に関する表5も参照のこと。

※日高山脈館：所在地は北海道沙流郡日高町。設置主体は日高町。北海道の中軸をなし、地質学的にも貴重な日高山脈を題材に、岩石・地質を中心として自然、産業、登山の歴史などを紹介する。1999年6月26日閉館。学芸員1名(地質学)。

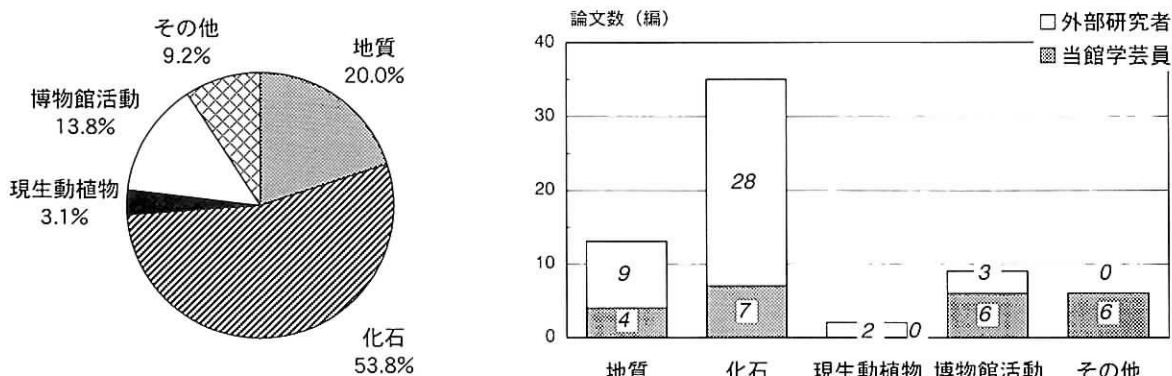


図3 穂別町立博物館研究報告の内容および執筆者

第1号(1984年)～第16号(2000年)の研究報告の内容(左図)と内容別執筆者(右図)。

内容では地質・化石に関する論文が48編(73.8%)を占め、また、執筆者では外部の研究者からの投稿が42編(64.6%)を占める。なお、内容の「その他」は、目録や地質学全般に関する論文である。

B. 収集・保存

地徳(1995b)によれば、「普及・教育」をどのように構成するかという観点で行われ、「調査・研究」によって裏付けられた活動である。1992(平成4)年の展示更新に伴う自然史博物館への転換以降、穂別町内から産出する自然史資料(化石や地質)に重点を置いている。

(1)収集

穂別町内の化石産出地における化石採集(野外調査)および、地域住民からの寄贈(不定期)が主体である。近年は採集および寄贈を基本とし、借用・寄託・購入は原則として行っていない。

(2)保存

収集した資料の保存・管理である。「自然史系」、「自然系」、「人文系」の3つに大別し、各々登録番号を付して保管している。なお、分類は地徳(1989)に従い、登録資料数は2000年3月1日現在のものである。登録資料の内訳については、図4を参照。

自然史系資料(HMG-)：化石を中心とする地学関連資料。登録資料数1067点。

自然系資料(HMB-)：現世の生物を中心とする生物学関連資料。登録資料数77点。

人文系資料(HMC-)：近世、近代の人間の生活を中心とする資料。登録資料数3726点。

HMはHobetsu Museum Registration Numberを表わし、Gは自然史系、Bは自然系、Cは人文系資料であることを意味する。

自然史系資料の内訳は、種類では軟体動物、時代では中生代がともに約90%を占める(図4)。これは、穂別地域に分布する中生界より化石が豊富に発見され、その中でも海棲軟体動物(アンモナイトやイノセラムス)が多くを占めていることを反映している。自然史登録資料の主なものについては、表5を参照。

(3)資料の登録過程

穂別町立博物館における資料の収集・保存の方法

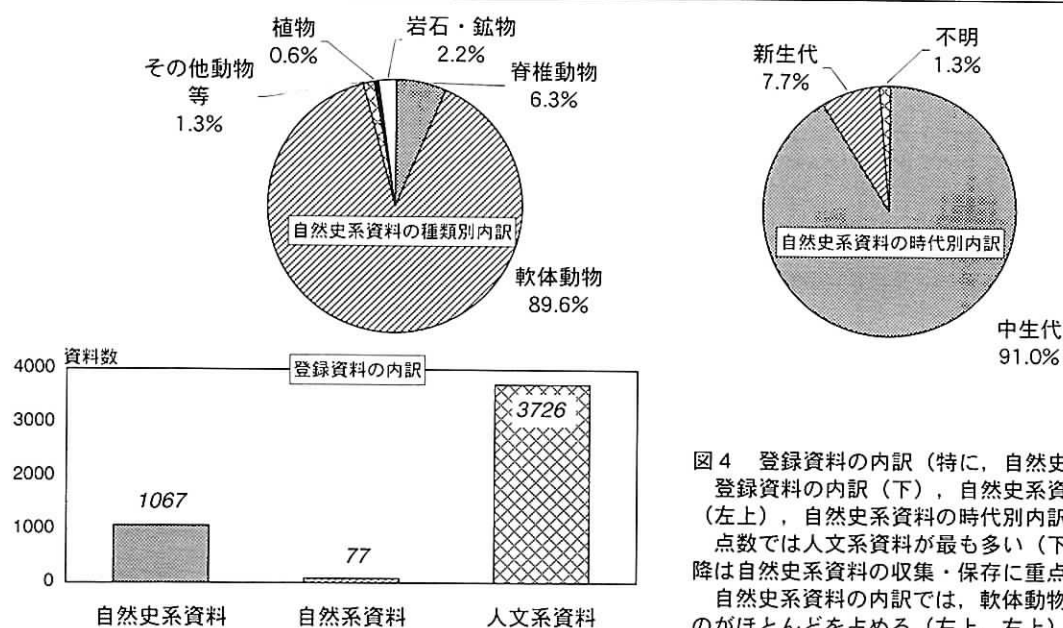


図4 登録資料の内訳 (特に、自然史系資料に関して) 登録資料の内訳(下)、自然史系資料の種類別内訳(左上)、自然史系資料の時代別内訳(右上)。点数では人文系資料が最も多い(下)が、1992年以降は自然史系資料の収集・保存に重点を置いている。自然史系資料の内訳では、軟体動物および中生代のものがほとんどを占める(左上、右上)。

大分類	中分類	小分類	登録番号	学名等	時代	発見年	文献	備考	
脊椎動物化石	魚類	サメ	-	<i>Notorynchus</i> ? sp.	中生代 白亜紀 後期	1977	久家(1984)	HMG-1 に伴って産出	
		長頸竜	HMG-1	PLESIOSAUROIDEA gen. et sp. Indet.		1977	Nakaya(1989)ほか	徳別町立博物館設立のきっかけとなった化石	
	HMG-3, 4, 350, 351 ほか多数		PLESIOSAUROIDEA?	1977 ほか		地徳(1990)			
	HMG-1067		PLESIOSAUROIDEA?	1993		-	研究中		
	HMG-12		<i>Mosasaurus hobetsuensis</i> Suzuki, 1985	1982		鈴木(1985b)ほか	東アジアで初めて記載された <i>Mosasaurus</i> .		
	爬虫類 (モササウルス類)	HMG-1065	<i>Mosasaurus prismaticus</i> Sakurai, 1999	1995		櫻井・地徳・渋谷(1999)	徳別で2番目の <i>Mosasaurus</i> .		
		HMG-371	<i>Tylosaurus</i> sp.	1985		地徳(1994)ほか	生体復元模型を展示(実物大)		
		HMG-11	Plioplatecarpinae? gen. et sp. indet.	1982		鈴木(1985a)ほか	詳細は研究中		
		ウミガメ	HMG-5, 7, 369, 1062 ほか多数	<i>Mesodermochelys undulatus</i> Hirayama and Chitoku, 1996		1977 ほか	Hirayama and Chitoku (1996)ほか	オサガメの祖先	
	哺乳類	クジラ	HMG-387	<i>Kentriodon hobetsu</i> Ichishima, 1994		新生代 新第三紀 中新世	1987	Ichishima(1994)ほか	イルカの祖先
			HMG-343	<i>Desmostylus japonicus</i>		1978	木村(1985)ほか		
		頭足類	アンモナイト	HMG-1061		<i>Gaudryceras venustum</i> Matsumoto, 1984	中生代 白亜紀 後期	1995	Matsumoto and Toshimitsu(1995)
	HMG-344	<i>Pachydesmoceras pachydiscoide</i> Matsumoto, 1954	1988	Matsumoto(1989)		巨大アンモナイト			
二枚貝類	イノセラムス	HMG-937, 938, 939 ほか多数	<i>Sphenoceras he-tonaianus</i> (Matsumoto, 1952)	1990	Matsumoto, Toshimitsu and Noda(1993)				
生痕化石			HMG-1059	<i>Zoophycos. Chondrites</i>	1992	利光(1994)			

表5 穂別町立博物館の主な登録資料

自然史系登録資料のうち、主に大型動物化石について示す。研究者に関しては表4を参照。

は、地徳力(元学芸員、1985-1999年在職)によって整理がなされ、現行では受入→仮収蔵→研究→登録→収蔵という手順で行われている(地徳; 1989, および図5を参照)。このうち、受入と登録の作業に関しては、現在は、川上源太郎(元学芸員、1994-1998年在籍)によって構築された、Windows上で動くMicrosoft社製Accessによるデータベースを用いて管理されている。ただし、このデータベースにも様々な改善の余地が残されており、今後の大きな課題の一つである(詳細については、別の機

会に譲る)。

C. 普及・教育

地徳(1995b)によれば、基本は常設展示であり、その他として一時展示(特別展)、博物館講座、体験学習などが挙げられる。その他、広報活動(広報紙の発行やマスコミの活用など)がある。

(1)常設展示

常設展示室において、常時公開している。休館日は月曜日、祝祭日の翌日、月末、年末年始、ただし7月・8月は無休。開館時間は9:30~16:30である。

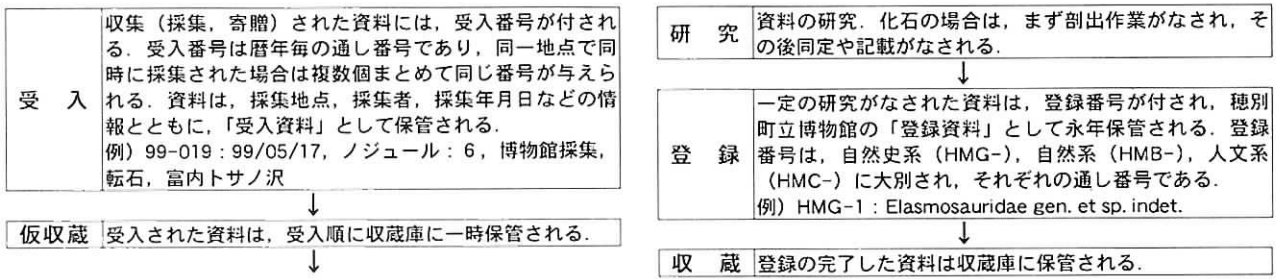


図5 穂別町立博物館の資料登録過程

現在は、受入→仮収蔵→研究→登録→収蔵という流れで登録作業を行っている。  
 主要な登録資料（自然史系）に関しては、表5を参照。

		分 類	点数
化石	脊椎動物	魚 類	7
		長 頸 竜	10
		モササウルス類	6
		カ メ	5
		不 明	1
		ク ジ ラ	8
		デスモチルス	3
		長 鼻 類	1
		霊 長 類	8
		頭 足 類	88
	軟体動物	腹足類 (巻貝)	29
		斧足類 (二枚貝)	38
		掘足類 (ツノガイ)	4
		その他の動物	
		甲 殻 類	7
		ウ ニ	4
		植 物	4
	生 痕	2	
現生生物	脊椎動物	爬虫類	カ メ 3
		哺乳類	ク ジ ラ 4
	軟体動物	頭 足 類	1
		甲 殻 類	1
	その他の動物		
	植 物	1	
復原模型	脊椎動物	爬虫類	長 頸 竜 1
			モササウルス類 1
			カ メ 1
		岩 石 そ の 他	21
		計	260
ジオラマ	「穂別周辺の地形」 「白亜紀の海底」 「産状レプリカ (HMG-1)」		3
映像	「海と陸の戦い」 「クビナガリュウ物語」 「よみがえるクビナガリュウ」 「地球の誕生と生命の歴史」		4
端末	「ホッピー百科」		1

表6 常設展示資料一覧

常設展示室と入口ホールの展示資料の内訳。  
 個数は原則として個体数であるが、複数個体が密集したままのもの（分離していないものは1個とみなした（2000年3月1日現在））。

開館（1982年）当時は、入口ホールの長頸竜全身復原骨格を目玉とし、自然史系資料（穂別町の地質と生物の進化）と人文系資料（開拓の歴史、昔の農機具等）の双方を展示していた。展示更新（1992年）に伴う方針転換以降、町内から産出する動物化石を中心とした自然史系資料に絞って展示している。展示資料数は260点（2000年3月1日現在）。そのうち、復原模型3点やレプリカを含めた化石資料

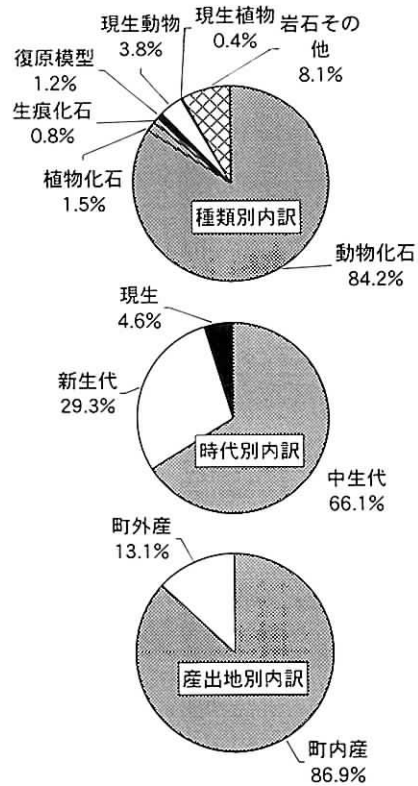


図6 常設展示資料の内訳

常設展示室と入口ホールの、展示資料の種類別内訳（上）、生物資料の時代別内訳（中）、展示資料の産出地別内訳（下）。2000年3月1日現在。種類では化石が圧倒的多数を占め、時代では中生代が大部分を占める。展示資料の分類別の内訳は、表6を参照。

は228点（87.7%）であり、その他は比較標本としての現生生物資料（11点、4.2%）や穂別地域に分布する岩石等の資料（21点、8.1%）である。復原模型を含めた生物資料239点の時代内訳は中生代が158点（66.1%）、新生代が70点（29.3%）、現生が11点（4.6%）である。展示されている全資料のうち、町内から産出したものは226点（86.9%）である。詳細は表6および図6を参照。

開催期間	タイトル	内容	備考
1982年12月19日-1983年1月23日	よみがえるクビナガリュウ	1982年12月21日から一般公開された長頸竜復元骨格に合わせて、発掘から復元までを振り返り、また、同時代の生物を穂別町内から産出した化石を用いて紹介。	第1回特別展
1983年7月22日-8月7日	地図展	地図のいろいろ(地形図、地質図、植生図、自動車網路線図など)、穂別の地図(地形図、郵便局郵便区全図、鶴川穂別中島平面図など)。	第1回収蔵資料展
1983年11月1日-3日	こけし展	伝統こけし、新作こけし、郷土玩具の展示	第2回収蔵資料展
1984年11月1日-4日	古い写真・古い文書展	寄贈された写真や文書の中から時代の古いものを展示。	第3回収蔵資料展
1985年11月1日-10日	北海道一億年	北海道開拓記念館にて開催された「北海道一億年」(1985年8月1日-9月29日)の移動展として開催。フタバズキリュウ(いわき市)、アロサウルスの他、穂別町内から発見された脊椎動物化石を展示。	第2回特別展示
1986年10月21日-11月9日	穂別の自然	第30回穂別町民文化祭の特別展示として開催。穂別町内に生息する動植物の標本を中心に展示。砂金堀りなどのビデオも上映。	第3回特別展
1987年7月28日-8月9日	アンモナイトの系図	アンモナイトの系統、形態、種類、生態、穂別で採取できるアンモナイトなどについて紹介。	第4回特別展
1988年8月23日-9月4日	穂別のカメ化石	穂別町内から産出するウミガメ化石(メソダーモケリス)、カメの系統、カメの祖先の復元図、カメの骨格について展示。	第5回特別展
1989年7月18日-8月20日	穂別のむかし =写真で見る穂別の歴史=	写真で穂別の歴史を振り返る。穂別の産業、生活の紹介。穂別町市街図、旧住宅内部の展示。	第6回特別展
1990年8月18日-9月16日	戦争と穂別	第二次世界大戦が穂別町に与えた影響を紹介。戦争関連資料の展示。	第7回特別展
1997年7月6日、7月10日-8月31日	クビナガリュウ発掘20周年記念事業パネル展	長頸竜化石発掘から20年の経過を記念し、発掘当時をパネルで振り返る。7月6日は記念セレモニーおよび仲谷英夫博士(香川大学)による記念講演。7月10日から穂別町立博物館特別展示室にて展示。	第8回特別展
1998年8月11日-31日	地球物語り (地質学普及書の近代史)	佐々保雄氏(北海道大学名誉教授)より寄贈された「佐々文庫」を元に、地質学普及書の変遷を展示。戦前、2つの大戦、戦後、そして現代と時代や世界情勢の変化の中で生まれては消えた普及書の紹介。	第9回特別展
1999年8月1日-31日	滄龍の泳いだ海 -7,000万年前の穂別-	約7,000万年前、海だった穂別を泳いでいた滄龍(モササウルス類)の紹介。東アジアで最初の発見となったホベツモササウルスの他、穂別町立博物館の所蔵する滄龍化石の展示。	第10回特別展
1999年10月5日-11月28日	穂別の自然	穂別町内に生息する植物をパネル等で紹介。地域住民からの寄贈資料をもとに開催。	第11回特別展

表7 これまでに開催された特別展・企画展

(2)特別展

夏休み時期および不定期に、年数回(1998年度は1回、1999年度は2回)開催している。

常設展示で公開されている内容のうち特定のものに絞って最新の研究成果を紹介したり、博物館の「調査・研究」の成果を公表、または普段展示していない資料を公開する機会である。博物館の「調査・研究」の成果に関しては、学会発表や論文発表が研究者に対して発表する機会であるのに対して、特別展はより幅広い人々に紹介する機会である。

原則として当館の収蔵資料を用いて、学芸員を含めた博物館職員の手によって企画・準備・開催される。1982年以降、14回の特別展や「収蔵資料展」が開催されている(1992年の展示更新の前後で、しばらく中断している)。これまでに開催された特別展については、表7を参照。

(3)普及行事

展示案内、化石採集会、化石剖出作業など、日時・場所・内容を定めて実施する行事である。1999年度現在、博物館主催(もしくは共催)で年数回程度実施しており、その他の大部分は外部からの依頼への対応である。その他、詳細は表8を参照。

なお、近年「体験学習」への関心が高まってきているためか、「化石採集会」に対する要望が増えている感がある。ただし、穂別町は「化石の産地」と

して知られているとはいえ、多人数を安全に案内できる場所のごく限られている。また、博物館の職員数や現地の状況から、一度に対応できる人数も限られている。化石採集を体験できる場所をどのように確保していくのが今後の課題の1つである。

(4)広報活動

定期的なものでは博物館広報紙の発行(月刊)があり、その他は不定期である。

a.博物館広報紙の発行

穂別町立博物館の広報紙として「ホッピーだより」を発行している。月1回(月末)、A4版両面の白黒印刷である。内容は、展示資料の紹介、関連する専門用語の解説、博物館行事の案内や報告、学芸員の業務紹介などである。翌月の休館日と行事予定を毎月掲載している。1983(昭和58)年4月に創刊、2000(平成12)年3月号で通巻184号となる(常設展示の更新に伴い、1992年に一時休刊している)。町内各戸に穂別町広報とともに配付され、最新の号は常設展示室にも常備されている。1998年度から、町外の数館の博物館へも送付している。

b.マスコミの対応

テレビ局や新聞社などからの問い合わせの対応、研究成果の公表、博物館活動や展示資料を紹介する取材への協力などがある。不定期である。

事業名	目的	内容	対象	実施場所	備考
展示案内	展示資料のより深い理解。	常設展示室の見学案内。「化石剖出」や「化石採集会」、「地質見学会」などと合わせて実施される場合もある。	小中学校(修学・研修旅行)、学生・教職員等(研修・視察)	入口ホーシテ展示室	一度に案内できる人数が限られる。
化石剖出(クリーニング作業)	研究の準備段階としての作業の体験。	岩石中から化石を取り出す作業。「化石採集会」で各自採集した資料、各自が独自に採集した資料、当館が用意してある資料を用いる。野外活動の雨天時の代替で実施される場合もある。	小中学校(修学・研修旅行)、学生・教職員等(研修・視察)	特別展示室	対応人数に制限(子ども40人程度)。特別展示室の使用期間中は実施不可。
化石のレプリカ作成	展示や資料交換に用いられるレプリカ作成の体験。	化石資料のレプリカ(複製)を作成する作業。現時点では粘土と石膏を用いた簡便な方法で行っているため、特に参加費等は徴収していない。	小中学校(修学・研修旅行)、学生・教職員等(研修・視察)	特別展示室	大抵、「化石剖出」とともに行われる。
化石採集会	化石の産状について知り、収集活動を体験する。	町内の化石産出地における化石の採集。「化石剖出」と合わせて実施される場合もある。	小中学校(修学・研修旅行)、地域住民	町内の化石産出地	天候に依存。採集場所や対応できる人数が限られる。
地質見学会	地質(地層)の観察。	穂別町内で見られる地質の見学。前述の「化石採集会」では、化石の採集そのものが目的となるが、これは地質(地層)そのものの観察である。	学生・教職員等(研修)	町内の地質見学地	地質の見学に適した場所が限られる。
講演会	穂別地域の化石や地質の紹介	穂別地域から産出する化石や、地質について紹介する。「展示案内」や「地質見学」と合わせて実施される場合もある。	不特定	特別展示室、他町村の公民館等	穂別地域と関連のある近隣地域で実施する場合もある。
博物館めぐりツアー	近隣の博物館・資料館の見学	近隣の博物館の見学。「博物館スタンプラリー」(日胆地区博物館等連絡協議会)に合わせて、1999年6月23日、8月27日、10月27日の3回実施。	地域住民	胆振・日高・道央の博物館計15館	博物館主催で、1999年度に初めて実施。

表8 普及事業の種類と内容

穂別町立博物館が実施している主な普及事業の種類と内容。「普及・教育」のうち、展示や広報活動を除いたイベント的な事業。

区分	名称	概要	備考
学会	日本地質学会(学術大会)	1999年で設立以来106年目となる、日本地質学会の全国大会である。広い意味での地質学(古生物学も含む)に携わる全国の研究者が集う。学術大会は年1回、国内の大学が持ち回りで開催地となり、よって基本的に道外である(1998年度は松本市、1999年度は名古屋市)。	加入は個人名義。
研修	北海道博物館協会学芸部会	北海道博物館協会は道内全域の博物館が加盟する組織。団体会員173、個人会員68、賛助会員17(1999年6月25日現在)。学芸部会はその学芸職員の部会である。研修会は年1回、道内の博物館が持ち回りで開催地となる(1998年度は足寄町、1999年度は留萌市)。	
	日胆地区博物館等連絡協議会	道内全域の北海道博物館協会とは異なり、近隣地域における博物館相互の交流を目指して道内を行政区分をもとに5つのブロックに分けた1つ(1997年設立)。23館園が加盟(1999年6月現在)。研修会は年1回、ブロック内の博物館が持ち回りで開催地となる(1998年度は白老町、本年度はえりも町)。「日胆」は日高管内と胆振管内の意味(穂別町は胆振管内の東端)。	1999年度、加盟館園をめぐる「スタンプラリー」が実施された。
	北海道化石サミット	北海道内の化石を産出する市町村の首長会議。北海道内で産出する化石の保護対策や、その研究施設の充実をめざすための情報交換を目的とする。第1回は穂別町(1996年)。その後、沼田町(1997年)、足寄町(1998年)、本年度は小平町で開催。毎回10数の市町村が参加。	本年度、化石保護啓発ポスターが作成、配布された。

表9 研修のため加入している団体や学会等

穂別町立博物館で公務として参加しているものに限定して示す。

c. ホームページ

インターネット上に、穂別町立博物館の公式ホームページを1999年度から公開している。展示資料の紹介が中心である。ただし、依然未作成の部分があり、また、公開以来更新は一切なされていないため、現状ではほとんど宣伝活動を行っていない。情報の充実および更新が今後の大きな課題である。なお、URLを以下に示す。

<http://www.bekkoame.ne.jp/~hobemus/>

D. 学会・研修

研究成果の公表および情報収集、他の研究者との情報交換および交流の機会である学会と、学芸員同士の情報交換および交流の機会である道内・近隣地域の博物館協会・協議会の研修会が含まれる。これらは組織としては全く異なったものであるが、双方とも学芸員の資質向上および研修や情報交換の機会であるという点から、ここでは一括して扱う。各加盟団体の詳細については、表9を参照。

(1) 学会

現状では、公務として出席しているのは、日本地質学会の学術大会(全国大会)のみである(ただし、加入は個人負担である)。

(2) 研修

学芸員同士の情報交換および交流の機会として、北海道博物館協会の学芸部会研修会と日胆地区博物館等連絡協議会の研修会に参加している。また、「化石サミット」もここでは「研修」として扱った。参加することにより、他市町村の化石に関する取り組みを知ることができ、また、他市町村の学芸職員と情報交換や交流ができるためである。その他、大学や博物館等で開催されるシンポジウムや講演会などにも、当館の活動と関わりのある内容の場合には参加できることがある。

E. その他業務

前述した、「調査・研究」、「収集・保存」、「普及・教育」、「学会・研修」以外の業務である。ここでは、その内容から、博物館運営のための「博物館事務」と一般職公務員としての業務である「一般職業務」



年度	1998年度	1999年度
体制	学芸員2名	学芸員1名
調査・研究	1. 化石の研究(「モササウルスの新種」)*1 2. 地質の研究(「穂別のイギリス海岸」)*2 3. 地質学に関する調査(「日高山脈研究論文目録」)*3 4. 地質学に関する研究(「地学辞典小史」)*4 5. 研究依頼(日高山脈館より依頼)*5	1. 博物館活動に関する調査(本報告) 2. 博物館見学者に関する調査(別報)*6 3. 化石の研究(「穂別地域のモササウルス化石」)*7 4. 研究依頼(日高山脈館より依頼)*8
収集・保存	1. 野外調査: 22 2. 化石剖出: 3	1. 野外調査: 14 2. レプリカ作成: 2
普及・教育	1. 常設展示管理: 3 2. 特別展: 1 3. 展示案内: 10 4. 化石剖出: 3 5. 化石採集: 2 6. 地質見学会: 1 7. 講演会: 1 8. 広報紙発行(毎月): 12	1. 常設展示管理: 1 2. 特別展: 2 3. 展示案内: 17 4. 化石剖出: 4 5. 化石採集: 2 6. 地質見学会: 1 7. 講演会: 4 8. 博物館めぐりツアー: 3 9. 広報紙発行(毎月): 12

※項目名の後の数字は、実施件数(回数)を表わす。

表10 1998年度と1999年度の業務実績

1998年度と1999年度の博物館業務の実績を比較する。件数の比較は、図7を参照。

\*1: 櫻井・地徳・渋谷(1999)。\*2: 櫻井・地徳(1998)。\*3: 地徳(1999b)。\*4: 地徳(1999a)。\*5: 日高山脈館の展示資料に関する研究依頼。  
\*6: 櫻井(2000)。\*7: 櫻井(1999)。\*8: 日高町内から産出した動物化石に関する研究依頼。

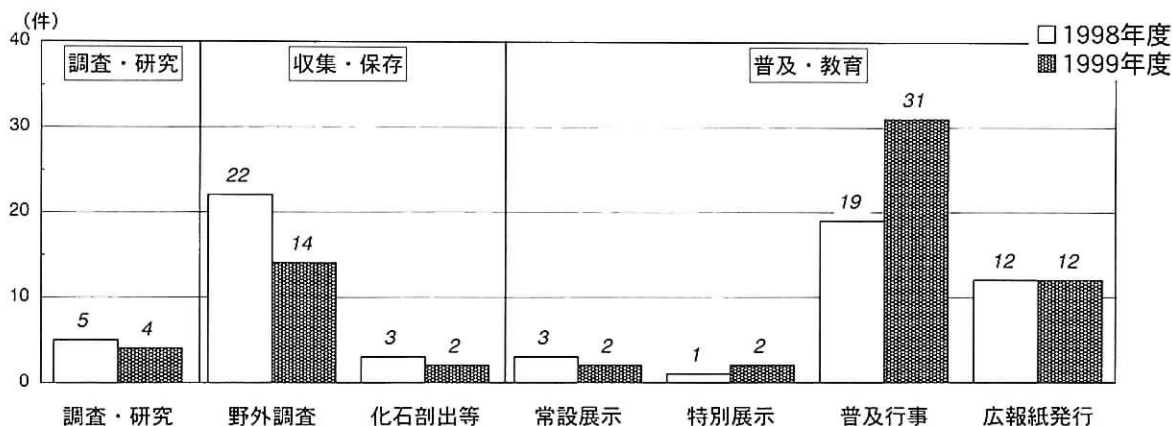


図7 業務分野別の実施件数の比較 (1998年度・1999年度)

1999年度は、1998年度と比較して「調査・研究」・「収集・保存」の件数が減少し、「普及・教育」の件数が増加している。あくまでも件数であり、異なった項目同士は単純に比較できない点に注意。実施された業務内容は表10を参照。

に分けて扱う。

(1)博物館事務

博物館を運営するための業務である。地徳(1995b)では、「博物館活動をバックアップするための業務」とされている。窓口業務(繁忙期のみ)、施設管理(冬季の除雪、展示室や博物館施設自体の補修・維持管理等)、事務部門との打ち合わせ、研究報告や博物館報の編集および発送などがある。

(2)一般職業務

一般職公務員としての業務である。教育委員会事務局の会議や公務員研修などがある。

Ⅱ. 1998年度と1999年度の活動内容の比較

1998年度と1999年度の穂別町立博物館の活動内容を紹介します。1999年度の活動内容の特徴を把握

する。

1. 1998年度と1999年度の業務実績

1998年度と1999年度における各業務分野の業務実績について、実施件数の比較を図7に、その内訳を表10に示す。

A. 1999年度の業務実績(実施件数)

1999年度は学芸員1名体制である。

「調査・研究」は4件。内訳は、化石が2件、博物館活動が2件(うち1件は本論)である。そのうち、口頭発表が化石1件(櫻井, 1999)、論文が博物館活動2件(本論および櫻井, 2000)、継続中が化石1件(日高山脈館)である。

「収集・保存」は野外調査が14回、レプリカ作

成が2件 (HMG-1065 の一部作成およびティロサウルス頭骨化石) である。

HMG-1065: *Mosasaurus prismaticus* の模式標本、1995年発見。詳細は櫻井ほか(1999)を参照。

ティロサウルス頭骨化石: 町外(北米?)産の、多少変形しているが完全な頭骨化石。筆者はレプリカ作成作業そのものには携わっていないが、化石の補修等を行った。なお、展示用のレプリカ作成は足寄動物化石博物館(足寄町)に依頼し、現在進行中。

「普及・教育」は常設展示の手直しが2件(HMG-1065の展示修正、アンモナイト展示の一部修正)、特別展が2件(うち1件は補助)、普及行事は31件、広報紙発行(毎月)は12回である。

#### B. 1998年度の業務実績(実施件数)

1998年度は、学芸員2名体制である。

「調査・研究」は5件。内訳は、化石が2件、地質が3件である。そのうち、口頭発表が地質1件(櫻井・地徳, 1998)、論文が化石1件(櫻井ほか, 1999)と地質2件(地徳, 1999a, b)、結果報告が化石1件(日高山脈館)である。

「収集・保存」は野外調査が22回、化石剖出が3件(HMG-1065, HMG-1066, HMG-1067)である。なお、化石剖出については、学芸員が携わったものに限定してある。

「普及・教育」は常設展示の手直しが3件(コイワシクジラ骨格標本の修正, HMG-1065の展示, HMG-1066の展示)、特別展示が1回、普及行事が19件、広報紙発行(毎月)は12回である。

HMG-1066: 直径約1mのアンモナイト化石。1998年発見。 *Pachydesmoceras pachydiscoide* と考えられる。

HMG-1067: 長頸竜化石。1993年発見。研究中。

コイワシクジラ: 当館所蔵の全身骨格標本。1998年11月から1999年1月にかけて、より自然な姿勢へと修正した。

#### C. 1998年度と1999年度の比較

1998年度と1999年度の業務実績を、業務分野別に比較する。なお、運営体制は、1998年度は学芸員2名に対し、1999年度は学芸員1名である。

「調査・研究」は、件数だけ見ると1998年度は5件、1999年度は4件とほぼ同じであるが、内容を見ると、1998年度は化石と地質に関する研究、1999年度は化石と博物館活動に関する研究が主であった。

「収集・保存」は、1999年度は前年度に比べて実施件数が減少し、野外調査が14回、レプリカ作成が2件など、前年度の2/3の件数となっている。

「普及・教育」は、1999年度は常設展示の管理が減少している以外は、前年度に比べて実施件数が増加し、普及行事(展示案内や化石剖出、講演会など)については31件と前年度に比べて1.5倍を超える件数を実施している。これには、1999年度に

初めて実施された「博物館めぐりツアー」(3回実施)も含まれている。月一回の広報紙発行はともに年間12回と増減はない。

「博物館めぐりツアー」: 日胆地区博物館等連絡協議会による「博物館スタンプラリー」(ラリー参加23館の博物館園を巡ってスタンプを集めると景品がもらえる。開催期間は1999年5月1日~2000年2月29日。)に合わせて開催。表8も参照。

1998年も件数だけ見ると「普及・教育」に重点が置かれていた印象を受けるが、1999年度はそれにも増して「普及・教育」により重点を置いた活動であったことがわかる。「収集・保存」の件数が前年度に比べて減少し、また、その件数自体も決して多くはないことはその反動と考えられる。

#### 2. 1998年度と1999年度の実施件数(月別)

前掲(表10, 図7)した業務の実施件数を月別に示す(図8)。なお、「調査・研究」の業務と「収集・保存」のうち化石剖出作業については、複数月にまたがっている。また、博物館広報紙が毎月発行されているため、各月とも最低1件は「普及・教育」活動がなされている。ただし、あくまでも件数であり、異なった項目同士は単純に比較できない。

##### A. 1999年度の実施件数(月別)

「調査・研究」は4~7月と10月以降行われている。前者は穂別産モササウルス類についての研究(櫻井, 1999として口頭発表)、10~12月は日高山脈館(日高町)から依頼された化石の同定業務(継続中)、1月以降は研究報告の原稿作成(本論を含む)である。

「収集・保存」は4~6月と8~11月にかけて行われている。基本的に野外調査であるが、1999年度はこの少ない回数の中にも、化石採集の他に化石採集会や地質見学会の下見が含まれている。

「普及・教育」は年間を通じて実施されている(各月とも広報紙発行以外に最低1件は実施されている)が、特に、6~11月にかけて件数が多い。中でも7月が大きなピークとなっているのは、展示案内を希望する団体見学者(小学校等)が夏休み前に集中したことによる。

##### B. 1998年度の実施件数(月別)

「調査・研究」は8~9月と1~3月にかけて行われている。前者は「イギリス海岸」(櫻井・地徳, 1998として口頭発表)、後者はモササウルス化石(HMG-1065)についての研究(櫻井ほか, 1999)および日高山脈館(日高町)から依頼された化石の同定業務、日高山脈の研究論文に関する調査(地徳, 1999b)、地学辞典に関する研究(地徳, 1999a)である。

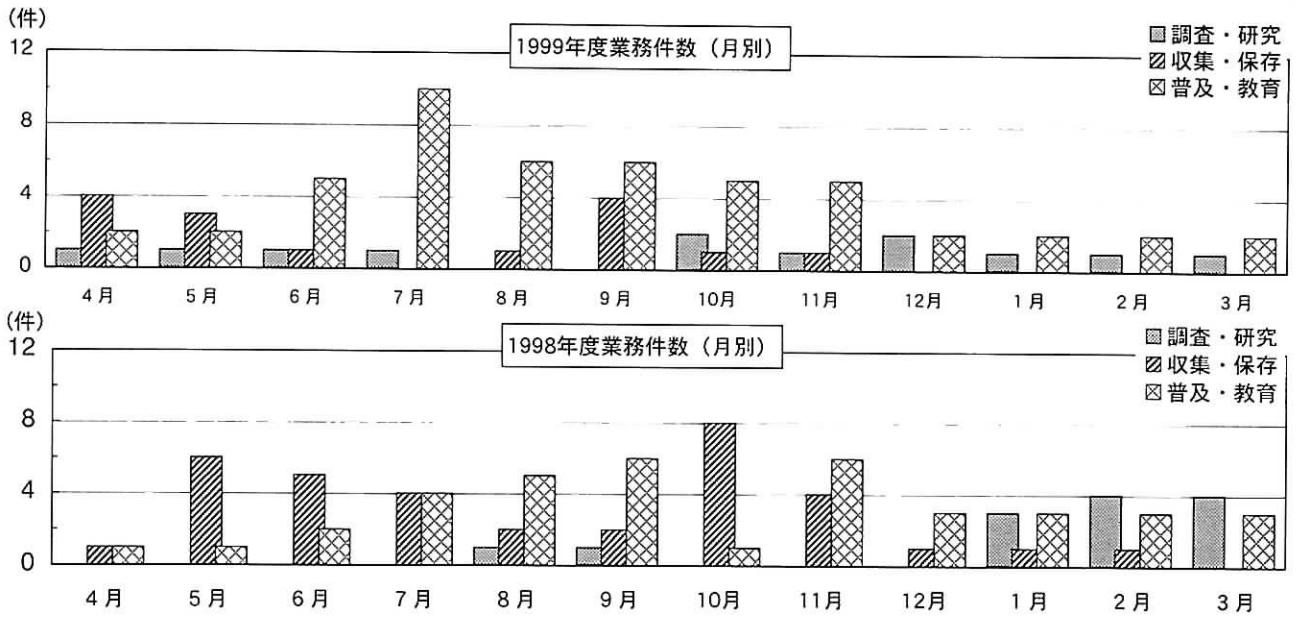


図8 1998年度と1999年度の業務件数(月別)  
 1998年度(下)と1999年度(上)の業務件数。「調査・研究」活動と「収集・保存」の化石剖出作業は数か月にまたがっていることに注意。

「収集・保存」はほぼ年間を通じて行われているが、5～7月と10～11月にピークが見られる。前者は野外調査(化石採集)および化石剖出(HMG-1067)で、後者にはHMG-1066の採集および剖出作業が含まれる。

「普及・教育」は7～9月と11月に多く実施されている。前者は、夏季のため来館者も多く、また、夏休み時期であるため、展示案内や化石採集会、化石剖出、地質見学会などを実施した。後者は、外部から依頼された講演や、化石剖出およびレプリカ作成の体験学習会を実施した。

C. 1998年度と1999年度の比較

「調査・研究」は、1998年度では冬季(1～3月)に集中していたのに対し、1999年度ではそれぞれ内容は異なるが8～9月以外に行われている。しかし、その成果を見ると、1998年度は口頭発表1件、論文3編、結果報告1件に対して、1999年度は口頭発表1件、論文2編である。

「収集・保存」は、1998年度ではほぼ年間を通じて行われ、5～11月の初夏～初秋にかけて多い。ただし、「普及・教育」や「学会・研修」の件数が多かった8～9月はやや減少する。それに対し、1999年度は4～5月と9月はやや件数が多いが、6～8月、10～11月はほとんど行われていない。この時期に「普及・教育」が集中したことが理由の1つと考えられる。野外調査(化石採集)については、北海道では降雪期以外の時期に限定される。穂別地域は道内でも降雪量の少ない地域であると言

え、野外調査に適した時期は4月中旬～11月中旬に限られる。6～8月にほとんど野外調査に行けなかったことが、年間を通しての「収集・保存」の件数の減少を招いたものと思われる。

「普及・教育」は、1998年度では7～9月と11月に多いが、1999年度では6～11月にかけて多い。また、この間は「調査・研究」と「収集・保存」はほとんど行われていない。夏～初秋にかけて「普及・教育」に重点を置いていたと言える。普及行事の内容が「展示案内」であれば事前の準備はほとんど必要ないが、「化石採集会」や「地質見学会」、「講演会」の場合は現地の下見や資料の作成など当日までかなりの準備の時間が必要である。1999年度の7～9月にはこうした行事が集中し、他の業務には手が回らなかったというのが実情である。

3. 1998年度と1999年度の業務分野別活動日数

穂別町立博物館の学芸員が、それぞれの業務分野にどれだけの日数を費やしているのかを把握する。

A. 調査の方法

毎日の業務内容を記録し、業務分野ごとに集計、分析する。業務分野は、博物館業務である「調査・研究」、「収集・保存」、「普及・教育」、そして「学会・研修」と「その他業務」に分けて集計した(各業務分野の内訳については、表3を参照)。

実際には、特定の業務に一日中従事している場合はまれであり、複数の業務分野にまたがっている場

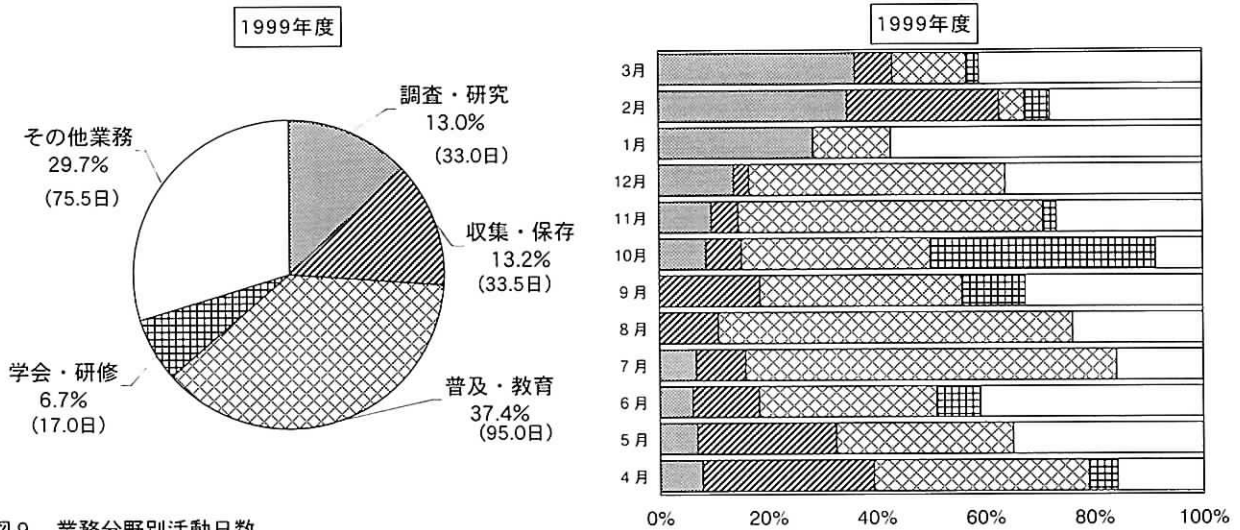


図9 業務分野別活動日数

1999年度の業務分野別の活動日数の年間（左）と月別（右）、凡例は共通。

「普及・教育」が全体の約37%で、「調査・研究」と「収集・保存」はその約1/3である。

月別でも、「普及・教育」は4～12月に渡って大きな比率を占めている。「調査・研究」は12～3月、「収集・保存」は4～5月と9月、2月に集中するが、それ以外の月では比率は小さい。

合が少なくない。厳密性を重視するには、従事した業務を時間ごとに記録することが望ましいが、非常に煩雑な作業となり、現実的ではない。よって、2種類以上の業務に従事した場合、それぞれ0.5日として計算した。いくつかの例を以下に示す。

例1) 学会に出席（一日中）：「学会・研修」1.0日

例2) 野外調査（午前）と新聞社の取材対応（午後）：「収集・保存」0.5日、「普及・教育」0.5日

例3) 会議と広報紙作成（午前）、化石研究（午後）：「その他業務」0.5日、「普及・教育」0.5日、「調査・研究」0.5日

上記の通り、3種類の業務に従事した場合、合計が1.5日となり、また、この計算方法では、時間外勤務は考慮されないなど、いくつか不備はあるが、全体としての傾向を捉える上では問題がないと判断した。

なお、ここで示す結果は、あくまでも筆者の従事した活動日数についての集計結果である。

#### B. 1999年度の業務分野別活動日数

1999年度に従事した業務分野別活動日数を図9に示す。

##### (1)1999年度の活動日数（年間）

1999年度の延べ254.0日の活動日数のうち、「普及・教育」が95.0日（37.4%）、「収集・保存」は33.5日（13.2%）、「調査・研究」は33.0日（13.0%）である。その他、「学会・研修」が17.0日（6.7%）、「その他業務」が75.5日（29.7%）である。それ

ぞれの博物館業務に費やされた時間の比は、「調査・研究」：「収集・保存」：「普及・教育」がほぼ1：1：3となる。

##### (2)1999年度の活動日数（月別）

月別に見ると、年間を通して「普及・教育」が大きな比率を占めている。特に、7月（68.2%）、8月（65.2%）、11月（56.1%）、12月（47.2%）に高い。それ以外の4～6月、9月、10月も33%～39%を占める。博物館業務に限定すると、4月～12月は「普及・教育」の比率が最も大きい。普及行事の実施件数の集中した6～11月（図8）のみならず、全般にわたって時間を費やしていたことがわかる。なお、比率の高い月については、7～8月は特別展の準備・開催と普及行事の集中、11～12月は講演会の準備によるところが大きい。

「調査・研究」は、1月（28.6%）、2月（34.9%）、3月（36.4%）に高いが、それ以外では極めて低く、8～9月は0%である。このうち、1～3月は研究報告の原稿作成（本論を含む）、10～12月は「化石の同定業務」（日高山脈館より依頼）、4～7月は「穂別産モササウルス化石の研究」である。しかし、1～3月はともかく、他の月では、「調査・研究」に費やされた時間は決して多くはなかったと言える。

「収集・保存」は、4月（31.6%）、5月（25.6%）、9月（18.6%）、2月（27.9%）にやや高い比率を示すが、それ以外は低く、1月は0%である。4～5月、9月が高いのは野外調査の実施による。2月はレプリカ作成のためのティロサウルス頭骨化石の補修・搬送作業による。

「学会・研修」は10月（41.3%）に集中し、そ

れ以外はほとんど実施されていない。年度内に参加できる学会や研修会が限られているため、これはやむを得ない結果である。

「その他業務」は1月(57.1%)をピークに5月、6月、9月、12月、3月など33%~41%という高い比率を示し、10月(8.7%)以外は概して高い。その内容は、事務部門との打ち合わせや博物館活動についての資料作成、施設管理などである。1999年度は学芸員が1名になったという体制変更により、事務部門との連携をより一層強めるべく打ち合わせに多くの時間が費やされた。また、博物館職員数も総数は7名であるが、そのうち窓口担当者は繁忙期以外は2名のうち1名のみのもので、さらに館長は併任であるため、実質的には5.5名である(表1を参照)。この人数で博物館を運営しているため、施設管理も学芸員の担当業務の1つとなっている(表3)。穂別地域は北海道にしては年間降雪量は少ないとは言え、冬季は除雪に時間が取られることとなる。実際のところ、午前中の大部分が除雪に費やされる場合もある。「その他業務」がかなりの比率を占めている背景には、こうした理由が考えられる。

以上、1999年度の月別の活動日数の傾向は月別の業務件数(図8)と調和的であり、「収集・保存」は4~5月、9月、2月、「調査・研究」は1~3月に集中して行われ、一方、「普及・教育」は7~8月と11~12月に集中するが、4~12月に渡って大きな比率を占めている。

### (3)1999年度の活動日数のまとめ

1999年度の全活動日数のうち「普及・教育」が全体の40%を占め、博物館業務に限れば、費やされた日数の比は「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」がほぼ1:1:3となり、「普及・教育」は他の博物館業務の3倍の日数を占めている。月別に見ても、「普及・教育」が月間活動日数の50~70%を占める月がある(7月、8月、11月、12月)。それぞれの博物館業務にどれだけの時間が割り当てられれば適正とみなすかは、博物館としてどの業務に重点を置いた活動を行っていくかによって異なるが、「普及・教育」に時間の大部分が占められ、その他の博物館業務にはその1/3しか割り当てられていない現状は、バランスの取れた活動内容とは言えないのではないだろうか。

### C. 1998年度の業務分野別活動日数

1998年度は8月以降の記録であるため、1998年8月~1999年3月の8か月間における活動日数について検討する。

#### (1)1998年度の活動日数(年間)

1998年度の集計(年間)を図10に示す。

調査実施期間(8か月)の延べ167.0日の活動日

数のうち、「収集・保存」は57.5日(34.4%)、「普及・教育」は36.0日(21.6%)、「調査・研究」は31.5日(18.9%)である。その他、「学会・研修」は20.0日(12.0%)、「その他業務」は22.0日(13.2%)である。それぞれの博物館業務に費やされた日数の比は、「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」がほぼ2:3.5:2となる。

#### (2)1998年度の活動日数(月別)

年間の比較と同様の期間について、月別に活動日数を集計したものが図11である。

「収集・保存」は10~12月(49%~68%)に集中する。これは10~11月初めの野外調査の実施およびこの際に採取されたアンモナイト化石(HMG-1066)の剖出作業による。もちろん、野外調査は5~7月にも実施されている(図8)が、図11には示されていない。

「調査・研究」は1~3月(43%~49%)に集中する。前半は日高山脈館(日高町)から依頼された化石の同定業務、後半はモササウルス(HMG-1065)についての研究(櫻井ほか、1999)である。

「普及・教育」は8~9月と12月(30%~35%)に集中している。8~9月は化石採集会や化石剖出、地質見学会などが実施されたため、12月はコイワシクジラの骨格標本の修正やアンモナイト化石(HMG-1066)の展示が実施されたためである。

「学会・研修」は9月(45%)と3月(15%)に行われている。なお、3月は、日本地質学会北海道支部1998年度例会(北大)にてモササウルスの新種(HMG-1065)を口頭発表したことによる。

「その他業務」は8月(27%)に高い値を示すが、それ以外は低い(20%以下)。8月は館報および研究報告の発送業務に携わっていたことによる。

以上、1998年度(1998年8月以降)の月別の活動日数の傾向は月別の業務件数(図8)とほぼ調和的であり、「調査・研究」は1~3月、「収集・保存」は10~12月、「普及・教育」は8~9月・12月に重点的に行われていた。なお、件数(図8)の上では11月に「普及・教育」のピークがあるが、実際に時間を費やしたのは12月であったことがわかる。

#### (3)1998年度の活動日数のまとめ

1998年8月~1999年3月の全活動日数のうち「収集・保存」が全体の34%を占め、それぞれの博物館業務に費やされた時間の比は、「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」がほぼ2:3.5:2となる。「収集・保存」に重点が置かれながらも、他の業務も一定の程度行われていたと言える。また、月別に見ると、それぞれの活動に重点をおいた時期が明確に異なる。なお、調査期間から外れている4~7月は、「収集・保存」が主で、この間は「普及・教育」

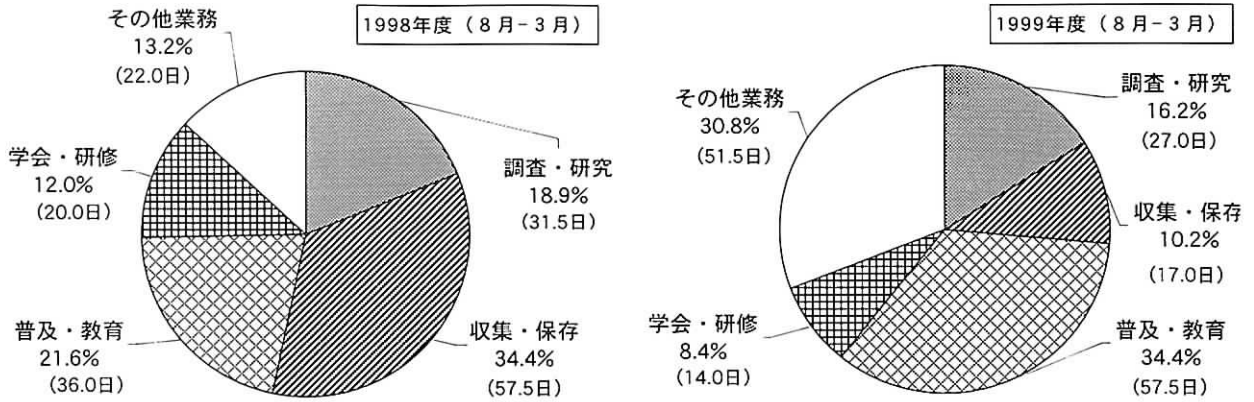


図10 業務分野別の活動日数(年間, 1998年度・1999年度)  
 1998年度の活動日数とその百分率(左)と1999年度(右).  
 1998年度は「収集・保存」に重点が置かれ「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」はほぼ2:3.5:2である.  
 1999年度は「普及・教育」に重点が置かれ「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」はほぼ1.5:1:3である.

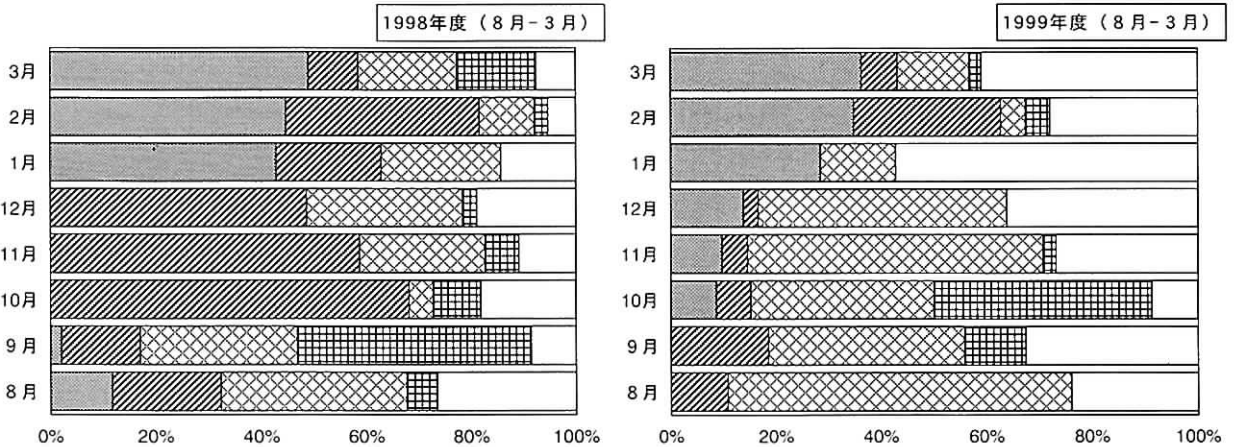


図11 業務分野別の活動日数(月別, 1998年度・1999年度)  
 1998年度の活動日数とその百分率(左)と1999年度(右). 凡例は図10と共通.  
 1998年度は「調査・研究」は1~3月, 「収集・保存」は10~12月, 「普及・教育」は8~9月と12月に集中する.  
 1999年度は「普及・教育」が8~12月に集中し, 「調査・研究」は1~3月, 「収集・保存」は9月と2月である.  
 なお, 1999年度は図9より該当月を再掲した.

は展示案内が数件, 「調査・研究」は行われていない(図8)ため, 年間を通して集計すると, 「収集・保存」にさらに重点を置いた結果になると思われる。  
 D. 1998年度と1999年度の比較

1998年度および1999年度について, 8月~3月というそれぞれ8か月間を比較する(図10, 図11)。なお, 1999年度については該当期間の活動日数を取り出して再掲してあるため, 前出(図9)との違いに注意されたい。

(1)活動日数(年間)の比較

1998年度で最も大きな比率を占めているのは「収集・保存」(57.5日, 34.4%)であるのに対し, 1999年度は「普及・教育」(57.5日, 34.4%)である。「調査・研究」:「収集・保存」:「普及・教育」に費やされた時間の比が, 1998年度は2:3.5:2に対して, 1999年度は1.5:1:3である。また, 1999年度は

「その他業務」が大きな比率(51.5日, 30.8%)を占め, 1998年度(22.0日, 13.2%)の2倍以上となっている。1998年度は「収集・保存」に重点が置かれながらも他の博物館業務も一定の程度行われていたと言えるが, 1999年度は「普及・教育」と「その他業務」が大きな比率を占めた反動で, 残りの業務の時間が少なくなったと言える。

(2)活動日数(月別)の比較

1998年度では, 「調査・研究」は1~3月, 「収集・保存」は10~12月, 「普及・教育」は8~9月・12月と, 重点が置かれた時期が明確に異なるが, 年間を通して「収集・保存」が一定以上行われていたと言える。また, 1999年度は, 「調査・研究」は1~3月, 「収集・保存」は9月・2月, 「普及・教育」は8~12月に集中するが, 8~12月は「調査・研究」と「収集・保存」の比率がともに低く,

0%~20%以下である。大部分の月で「普及・教育」が多くを占めていたのが1999年度の特徴と言える。

### Ⅲ. 1999年度の活動内容の総括

以上、見てきた1998年度と1999年度の比較から、1999年度の活動内容を総括する。

#### 1. 評価

##### (1) 「普及・教育」の実施件数の増加

1998年度と比較し、1999年度は、「普及・教育」により重点が置かれたと言える。「普及・教育」の実施件数、特に展示案内や化石採集会等の普及行事の実施件数は1.5倍となっている(図7)。運営体制が学芸員2名から1名になったことを考慮すると、学芸員1名当たりの件数は3倍になったと言える。

「普及・教育」活動は、「調査・研究」や「収集・保存」という博物館活動の成果を公表する活動であり、「外」へ向けての活動である。数多く実施できるに越したことはない。1999年度の実施件数でも、決して多いとは言えないであろう。しかし、「普及・教育」に費やした時間を見ると、他の業務との兼ね合いを考える限りでは、ほぼ上限であった感はある。

#### 2. 問題点

##### (1) 活動内容のアンバランス

1999年度は、「普及・教育」に重点を置いた反面、「調査・研究」および「収集・保存」に費やされる時間が少なかったと言える。

「博物館」は、資料を「調査・研究」し、「収集・保存」し、「普及・教育」に活用する機関である。各業務のバランスが保たれていなければ、十分な機能は果たせない。「収集・保存」がなければ新たな資料は入手できず、「調査・研究」がなければ新たな成果は生まれない。結果として、新たな展示資料の追加や展示内容の更新は望めない。それぞれの業務のバランスを保っていくことが重要である。

例えば、「調査・研究」のみに没頭した場合、研究成果は頻繁に公表することができ、研究者からは高い評価を得られるであろう。穂別地域から産出する化石や地質についての研究が進み、学問の発展に寄与することができる。しかし、その反面、「普及・教育」活動を実施しないことにより、町民を含め外部からは「何をやっているのかわからない博物館」となる。

「収集・保存」に没頭した場合、新たな資料は増加し、また、収蔵している資料も常に完全に把握していることとなる。博物館自らは研究活動を行わなくても、外部の研究者の要求や問い合わせには即座に対応でき、研究の支援という形で大きな役割を果た

すことができる。また、「国際動物命名規約」(国際動物学会議、1999年に第4版が出版)において勧告されているように、「資料の保管」は公的研究機関に与えられた重要な使命である(勧告72A、日本学術会議、1966;渡辺、1992;馬渡、1994などを参照)。資料を確実に保管しているという点で、研究者から高い評価を得られるであろう。しかしその一方で、外部からは「何をやっているのかわからない博物館」と見られるおそれがある。

「普及・教育」のみを行った場合、年間を通した普及行事の件数はかなりの数に達する。外部と接する機会が増え、常に何らかの行事が行われていることとなる。「活発に活動している博物館」との印象を持たれるであろう。しかし、その反面、「収集・保存」がなされず、新たな資料の追加は望めない。収蔵資料の把握ができず、外部の研究者からの問い合わせに対応できない。また、「調査・研究」がなされないことにより、新たな研究成果は得られず、学問の発展からは取り残されることとなる。ひたすら外部へ向かった活動を続けているうちに、博物館としての目標が見えなくなってしまうおそれがある。

以上は極論であるが、著しく偏った活動は様々な面で支障をきたすことは想像に難くない。

##### (2) 「普及・教育」の内容

1999年度は「普及・教育」の実施件数は増加したが、実際に増加したのは、展示案内や化石採集会、講演会などの「イベント事業」の実施件数である。その一方で、常設展示の管理(常設展示見直し)は2件しか行われていない。

地徳(1995b)によれば、普及活動の基本は常設展示である。常時公開されており、不特定多数を対象にしているという点から、常設展示が最大の普及活動であることは疑いが無い。「博物館」という言葉から大抵の人は展示室を思い浮かべるように、常設展示室は博物館の顔である。事実、穂別町立博物館には、年間を通じて、穂別町の全人口の3~5倍という見学者が訪れているのである。

常設展示は、「調査・研究」や「収集・保存」の成果を公表する場である。当館が題材としている化石を例に取り上げても、採集→剖出→研究→展示、と新たに展示室に追加されるまでには相当な労力と時間が必要なのである。また、一度作り上げた展示は恒久的なものではない。学問の進展により、常に更新が求められる。このように常設展示の管理は非常に手間のかかる作業であり、大幅に変更しない限り外部から気づかれにくいものではあるが、博物館としての重要な業務の一つなのである。

展示案内や化石採集会などの普及行事の実施はもちろんであるが、「魅力ある博物館づくり」を目指

す上では、「博物館の顔」としての常設展示を充実することが基本であると考えられる。

### (3)「その他業務」の比率

1999年度は「その他業務」の比率が29.7%に達し、「調査・研究」や「収集・保存」の2倍以上を占める(図9)。これは、学芸員が1名となったという体制変更により、事務部門との連携をより一層強めるべく、打ち合わせに多くの時間が費やされたのが大きな理由と考えられる。逆に言えば、これだけ小人数(職員総数7名、内訳は表1を参照)であれば、「学芸部門と事務部門の意思の不通」などというという事態はまず起こり得ない。大堀(1997)による、『開かれた博物館』のために必要な条件」の1つは既に満たしていることとなる(詳しくは後述)が、打ち合わせに時間を大きく費やすのは決して望ましいことではない。

## 3. 解決へ向けて

上記の問題については、次の2点の原因が考えられる。

### (1)学芸員が減員となった

1998年度から1999年度にかけて、学芸員は2名から1名へと減員になった。しかし、その一方で、1999年度は外部からの依頼を前年度よりも多く受け入れ、普及行事を数多く実施した。「普及・教育」の実施件数は前年度と比較して増加したが、その反面、「調査・研究」と「収集・保存」の件数は減少した(図7)のは、そのためと考えられる。

この点に関しては、人事の問題であり当方で関与できることではない。北海道内に限っても市立の博物館(もしくは相当施設や類似施設)でさえ学芸員等の専門職員数が充実している場合はまれである現状で、穂別町立博物館のように町立の「小規模」な博物館で、学芸員が1名というのは決して珍しいことではない。北海道博物館協会(1999)によれば、こうした小規模博物館では、学芸員等の専門職員が配置されていない館さえ多い。一時的にせよ、穂別町立博物館に学芸員が2名配置されていた(1994年4月～1999年3月)のは、他に比べると充実した体制だったわけで、これは大いに誇りに思うべきであろう。しかし、これまで2名体制で実施してきた活動を、1名でそのまま持続させることは非常に厳しい。また、改めて言うまでもなく、博物館の活動を担うのは学芸員である。多様な専門分野の学芸員が集まれば多方面にわたる活動が行え、また、同様な専門分野の学芸員が集まれば特定の分野を深めた活動が行える。人的制約によって博物館活動の規模や内容が縮小されることがないように、増員されるべく訴えていくより方法はないと思われる。

### (2)学芸員1名体制への不慣れ

前項と関連するが、減員されたことにより、1999年度は1名で運営しなければならなかったことが原因の1つであったと考えられる。

すなわち、1つの普及行事を実施するためにかなりの試行錯誤を繰り返したり、事務部門の協力を得るべく打ち合わせに時間を取られた結果、行事自体は無事実施することができたが、その反面、その他の活動へ手が回らなかったと考えられる。化石採集や剖出作業、収蔵資料管理といった「収集・保存」、文献による調査や化石そのものの研究といった「調査・研究」、「普及・教育」の中でも常設展示の更新などは、膨大な労力と時間を要する作業であり、片手間にできることではない。1999年度にこれらの業務をほとんど実施できなかったのは、まとまった時間が取れなかったことに他ならない。

小規模な博物館においては、学芸員の担当業務は博物館活動のみならず様々な範囲に及び(当館学芸員の担当業務は、表3を参照)。「普及・教育」はもちろんのこと、「調査・研究」さえも、事務部門の支援がなければ充分に行えないのである。

この点については、次年度以降は、事務部門との連携をより一層強めることと、経験を重ねることによる効率化によって、改善されていくことを期待したい。

## IV. 穂別町立博物館の今後の方向性

近年、博物館に対して求められていることをいくつか取り上げて検討した上で、穂別町立博物館の今後の方向性を模索する。

### 1. 博物館に求められていること

#### A. 「地域に根ざした博物館」

「地域に根ざした博物館」とは、亀井(1999)によれば、「単に地理的で行政的な範囲の地域のことを扱うということではなく、住民たちが、未来に向けての日常生活の基盤を構築する運動を進めるために、みんなで考えたり議論したり、自らの手で調査・研究の活動を展開していく場」であり、また、村上(1995)によれば、「従来の美術館や大規模広域館とは違い、特定の地域に密着した館であり、またそのように運営されるように位置付けられている。」とされている。また、直井(1999)は、自らが館長を務める江別市郷土資料館を例にとり、「江別を学ぶということは、単に町の歴史や自然、文化にとどまらず、限りない広がりとお興行がある。世界を知るには、まず最初に自らが何かを知らなければならぬ。」と述べている。

穂別町内から産出する動物化石を扱い、穂別町の



地史を紹介することを目的とした穂別町立博物館にとって、これら「地域に根ざした博物館」についての提言は、共感する部分も多く、また、今後目指していくべき1つの方向であると考えられる。

#### B. 「開かれた博物館」

大堀(1997)は「開かれた博物館」として、(1)地域社会に対して開かれていること(地域社会の人々に親しまれ、理解され、協力してもらえるような博物館)、(2)博物館の内部が開かれていること(職員相互の意志疎通が図られ、互いの担当分野に関しても関心を払い、情報交換を行う)、(3)生涯学習体制に対して開かれていること(生涯学習にかかわる地域社会の公的教育機関の一つとしての機能を果たす)、の3点を挙げている。また、青島(1998)は、「博物館は展示や普及教育活動を通じて、これまでも『開かれて』いた」としながらも、「近年提唱されている『開かれた博物館』とは、従来型の行政から市民への一方通行ではなく、行政と市民が一体となって作り上げる新しい博物館像が求められているのではないだろうか」と述べている。さらに、大石・竹谷・成田(1998)は、「博物館の収蔵庫の標本群は比較材料として過去からずっと『開かれてきた』」としながらも、『開かれた博物館』の名のもとに、展示内容や普及活動をさらに親しまれるものになるように工夫し、「一般市民の知的欲求に答えること」が必要であると述べている。

「開かれた博物館」を目指す場合、「何に対して」、「どのように」という点が重要となる。青島(1998)や大石・竹谷・成田(1998)に従えば、展示や普及教育活動を通じて、および多方面の研究者に対して、穂別町立博物館はこれまでも「開かれて」きたのである。ただし、そこには、「地域住民」という観点が少々弱かった感否めない。この点が穂別町立博物館として今後検討すべき課題であろう。

なお、大堀(1997)による「博物館の内部が開かれていること」は当館は既に満たしているものと考えられる。

#### C. 「小規模博物館の目指す方向」

糸魚川(1999)は、大型館に限定してであるが、自然史博物館に今後期待される役割として、(1)自然史学の確立、(2)地域の研究センター、(3)地域の教育センター、(4)地域の資料センター、(5)地域の情報センター、(6)環境・自然保護問題に取り組むこと、(7)博物館の地位の確立、(8)「人と自然」学の追求、の8点を挙げている。また、地徳(1995a)は、大規模な博物館が総合的な領域に関してそれぞれ深く追求しているのに対して、小規模な博物館には高度な専門性(「地域に関する専門性」および「学術分野に関する専門性」)が今後必要であると述べ

ている。

職員数も限られ、館の規模(展示スペースや、研究・作業のためのスペース)も限られた「小規模」博物館では、活動の内容・量・質に様々な制約を受ける。各分野を広く浅く扱うよりも、活動内容を絞り込んだ「ここにしかない博物館」を目指す方が、館としての独自性も表れ、存在意義も明確となる。穂別町立博物館はそうのように活動してきたと自負しているし、今後ともこの方向を目指すべきであると考えている。

#### D. 「観光施設」としての博物館

博物館はしばしば「観光施設」としての役割を期待される。実際のところ、当館の来館者の大部分は「町外から家族と観光に訪れた」見学者である(詳細は、櫻井、2000を参照)。隣接する穂別地球体験館「穂別地球体験館」(穂別町役場林務商工課管轄の体験型「観光施設」。様々な地球環境が体験できる。近年は自然観察会や創作体験など、各種の体験学習も実施している。)とともに、入館者数の増加が要求される。確かに、常設展示を1人でも多くの見学者に訪れてもらうことは歓迎すべきことである。町で博物館を建設する以上、「観光施設」もしくは「町おこし」という要素が入り込むのはある意味当然のことであろう。ただし、博物館本来の機能は、そのような要求とは必ずしも完全には一致していない。双方の主張がすれ違う場合も珍しくはない。しかしその一方で、「町や村に1つしかない博物館」であれば、そのような要素を全く否定することは、実際のところ、現実的ではない。博物館としての本来の機能と「観光施設」として期待される役割の妥協点を探っていくかざるを得ないのが実情である。

#### E. 「研究機関」としての博物館

博物館法(昭和26年制定、最近の改正は平成5年)およびICOM(国際博物館会議)による国際博物館会議職業倫理規定(1986年第15回総会にて採択)でも述べられている通り、博物館は「研究機関」としての側面も有している。

馬渡は、動物分類学に関する著書(馬渡、1994)の中で、「分類学の正しい認識および普及という意味において、地方博物館の果たす役割は大きい」と述べている一方で、学芸員は展示案内等の業務に忙殺されて研究など手につかない現状に対し、「せっかく分類学研究者になるべく教育を受けた者が、その可能性を博物館に就職することで失うとすれば、これほど無駄なことはない」と嘆いている。

穂別地域から産出する動物化石を収集・保存している穂別町立博物館は、動物分類学発展の一翼を担う立場にあり、実際にこれまでも数多くの分類学上の研究を行ってきた(表4参照)。穂別地域から産

出する動物化石を研究、もしくは研究の支援を行っていくことは、穂別町立博物館の大きな役割の1つであると考え。

## 2. 穂別町立博物館の方向性

以上の検討を踏まえ、穂別町立博物館の今後の方向性を探る。

### A. 穂別町立博物館の目指す方向

穂別町立博物館の目指す方向は、大きく下記の5点が挙げられる。

#### (1)穂別にしかない博物館

村上(1995)は、「隣接の市町村がごとく博物館や資料館を建設し運営することになると、その展示資料はほとんど同じものが展示され、どこによって特徴がなくなるが、来館者は他館と比較して他と違う特徴を求める。」と述べている。

地徳(1995a)も述べているように、穂別町立博物館は今後も専門性を追求し、穂別地域から豊富に産出する化石を中心として「ここにしかない博物館」を目指す。

#### (2)地域から世界へ

穂別町立博物館は、町内から産出した化石を中心として、穂別地域の地史を紹介する自然史博物館である。穂別地域から産出する化石は、世界各地で産出する化石と関連を持っている。また、穂別地域の地史は、地球の歴史と密接な関わりを持っている。これまで通り、地域の特色を紹介しながら、世界へと通じる博物館を目指す。

#### (3)地域との密着

穂別町立博物館は、穂別地域から産出する化石の研究を通じて、これまでも外部の研究者と連携・交流を行い、また、研究報告等の資料交換によって世界各地へ研究成果の発信・情報交換を行ってきた。一方、地域住民に対しては、広報紙などを通じて情報発信を行ってきたとはいえ、「地域住民にとって愛着のある博物館」であるかという点では、実のところ疑問である。町内で初めて長頸竜化石が発見され、博物館設立へ向けて盛り上がっていた気運は、間もなく開館20周年を迎えようとする現在はほとんど消えてしまったと見るのが妥当であろう。博物館が自らの目標へ向かって活動していくためには、地域住民の理解が不可欠であることは言うまでもない。今後は様々な方法によって、地域住民に対してより積極的に働きかけていく必要があると考える。

#### (4)地域の情報センター

糸魚川(1999)によって述べられている大型の自然史博物館に期待される役割の全てを果たすことは、現状の体制では不可能である。しかし、その一部であれば可能であると考え。中でも、穂別地域

から産出する化石を収集・保管し、関連する文献等を収蔵する、「穂別地域の化石(および地質)に関する情報センター」としての役割はこれまでも担ってきたと考えており、今後も果たしていくべき役割であると考え。その機能をより充実し、様々な要求に応えるためには、収蔵資料の公開(定期的な資料目録の発行)やデータベース化が急務であろう。

#### (5)常設展示の充実

地徳(1995b)は「『普及・教育』は常設展示にある」と述べており、村上(1995)は「常設展示とは、内容を固定した展示ではなく、常にその館が最新の情報を提供できる展示システムとして運営しなければならない展示である」としている。常時公開され、不特定の見学者を対象としている常設展示は、最大の「普及・教育」であることは疑いがなく、博物館の「顔」である常設展示を充実することが、魅力ある博物館づくりの第一歩であると考え。

### B. 各分野の活動方針

上述の目標を達成するための、博物館活動の各分野の活動方針を検討する。

#### (1)調査・研究

穂別地域(穂別町内およびその周辺地域)から産出する動物化石(および植物化石)を対象として調査・研究を行い、また、外部の研究者との連携や研究の支援を行う。

「調査・研究」は、他の博物館業務に先立って行われる活動である。「穂別地域から産出する化石を中心とした博物館」として必要な資料(化石標本)を効果的に収集するために、町内のどの地域からどのような化石が産出する可能性があるのか、近隣地域や類似した地域に関する研究成果の調査を行い、また、収集した資料をより早く常設展示に追加するために、資料そのものに関する研究および既存の研究成果を調査する。同様に、既に展示されている資料に関しても、新たな学説等を常に把握し、必要に応じて見直しを行い、常に最新の研究成果を反映できるように心掛ける。同時に、これまで通り、外部の研究者との連携や研究の支援を行っていく。

#### (2)収集・保存

穂別地域(穂別町内およびその周辺地域)から産出する動物化石(および植物化石)を対象として収集・保存を行う。資料を安全に管理し、次世代へ確実に引き継ぎ、また、外部の研究者の支援を行うためにも、収蔵資料の目録作成や資料管理データベースの整備を重点的に行う。

新たな資料を入手するために資料を収集することは重要な活動であるが、また同時に、資料を保管することも博物館の重要な使命である。これは「安全に保存する」(破損や紛失を防ぐ)ことだけを意味

しているのではなく、「活用できるように保存する」ことも意味している。研究された標本は、公的機関において安全に管理されることが「国際動物命名規約」において勧告されている（勧告 72A, 72D）。また、常設展示室のスペースは限られ、さらに展示にもテーマ性を持たせなければ散漫になってしまうため、収蔵資料の全てを展示することはできない。たとえ展示室で公開されていなくても、どのような資料がどこにあるか常に把握され、研究者等の要求に応じて提供することができれば、その資料は「生きている」のである。収蔵庫に納められたまま、何がどこにあるのかわからない状態となり、貴重な資料を「死なせている」（死蔵している）ことがないよう、資料の保存にも力を注ぎたい。

### (3)普及・教育

化石を多産するという地理的条件およびその化石を中心とした博物館の特色を活かし、「化石」を題材とした普及・教育活動を実施する。中でも、常設展示の更新に力を入れ、「穂別町立博物館」としての独自性を打ち出し、穂別地域の地史から地球の歴史が理解できるように、また、「収集・保存」、「調査・研究」の成果、そして最新の研究成果を常に反映できるように心掛ける。

常設展示は不特定多数が対象であり、常に最新の情報を実物を通じて提供できるという点から、最も有効な「普及・教育」である。外部から見える「博物館」の印象は、そのほとんどが常設展示によって決まると考えられる。何度も足を運びたくなくなるような、「魅力ある博物館づくり」を目指す。

さらに、情報発信のため、博物館広報紙や公式ホームページの充実に取り組む。その他の普及事業（「イベント事業」）については、外部からの依頼をこれまで通り受け入れながらも、「地域住民にとって愛着のある博物館」となるべく、地域に対してより積極的に働きかけていくものとする。

### おわりに

1998 年度から 1999 年度にかけての穂別町立博物館の活動実績を比較することを通して、穂別町立博物館の現状および抱える問題点が明らかとなった。その問題点は学芸員が直接関与できないもの（学芸員の補充）もある一方で、事務部門との協力体制や学芸員の努力によってある程度解決できるもの（1 名体制への対応）もある。

しかし、「小規模な博物館」としての役割を考えた場合、既に取り組んできた事柄も多く、また、今後も取り組んでいける見通しもある。

穂別町立博物館の設立へ寄せて、亀井（1984）は次のように述べている。「地域住民と密着して、

古脊椎動物学を通して、地域的特色に内在する一般性をひき出し、国際社会へ寄与することが期待されている。」。設立から間もなく 20 年が経過しようという現在も、そしてこれからもこの提言は穂別町立博物館の方針となっていくことであろう。

穂別町立博物館は、今後とも穂別地域から産出する動物化石を中心とし、「ここにしかない博物館」を目指し、地域に根ざして全世界へ発信できる博物館を目指す。そのためにも、一見地道に見える「収集・保存」の充実および常設展示の充実に力を注ぎ、より多くの研究者を支援できるよう、「穂別地域の化石（および地質）に関する情報センター」の役割を果たすことを目指す。そして何よりも、「地域住民にとって愛着のある博物館」を目指していきたい。

### 謝 辞

本報告をまとめるにあたって、地徳 力（穂別町立博物館・元学芸員）には全般にわたって貴重な意見を頂いた。当館の山田 正館長および芦谷優子主幹には、常日頃から博物館活動に関して議論して頂いている。以上の方々に心から御礼を申し上げる次第である。

### 文 献

- 青島睦治, 1998. 「開かれた博物館」とは何だろう-市民の側から見た公立自然史博物館-. 地質ニュース. 352 号. p. 20-23.
- 地徳 力, 1989. 穂別町立博物館の資料登録について-博物館資料の整理におけるパソコンの導入-. 穂別町立博物館研究報告. 5. p. 33-42.
- 地徳 力, 1995a. 博物館活動における情報リレーション. 穂別町立博物館研究報告. 11. p. 29-36.
- 地徳 力, 1995b. 博物館活動と小規模館の学芸員の業務についての考察. 穂別町立博物館研究報告. 11. p. 37-46.
- 北海道博物館協会, 1999. 平成 10 年度北海道博物館協会加盟館等現況. 北海道博物館協会. 195pp.
- 亀井節夫, 1984. 穂別町立博物館と日本の古脊椎動物学. 穂別町立博物館研究報告. 1. p. 3-9.
- 亀井節夫, 1999. 小さな博物館・大きな博物館. 博物館研究. 日本博物館協会. Vol. 34, No. 5. p. 4-8.
- 倉田裕裕・矢島國雄, 1997. 新版 博物館学. 東京堂出版. 東京. 408pp.
- 馬渡峻輔, 1994. 動物分類学の論理-多様性を認識する方法-. 東京大学出版会. 東京. 233pp.
- 村上 隆, 1983. よみがえるクビナガリュウ. 穂別町立博物館. 59pp.
- 日本学術会議, 1966. 国際動物命名規約. 北隆館. 東京. 102pp.
- 直井 孝一, 1999. 小規模地域博物館に何が可能か. 博物館研究. 日本博物館協会. Vol. 34, No.12. p. 41-45.
- 大堀 哲, 1997. 教師のための博物館の効果的利用法. 東京堂出版. 東京. 245pp.

- 大石雅之・竹谷 陽二郎・成田 健, 1998. 博物館の現場からみた学芸員のかかえる諸問題. 地質ニュース, 532号, p. 28-34.
- 櫻井和彦, 2000. 穂別町立博物館の采館者の傾向-1999年度調査結果より-. 穂別町立博物館研究報告, 16, p. 29-40.
- 高橋功二・和田信彦, 1985. 穂別町の地質. 穂別町立博物館研究報告, 2, p. 1-15.
- 渡辺千尚, 1992. 国際動物命名規約提要. 文一総合出版, 東京, 133pp.
- 「調査・研究」分野に関する文献
- 地徳 力, 1990. 穂別町立博物館所蔵の脊椎動物化石について. 穂別町立博物館研究報告, 6, p. 25-35.
- 地徳 力, 1994. 北海道穂別地域産ティロサウルス(モササウルス類)について. 穂別町立博物館研究報告, 10, p. 39-54.
- 地徳 力, 1999a. 地学辞典小史. 穂別町立博物館研究報告, 15, p. 1-15.
- 地徳 力, 1999b. 日高山脈研究論文目録. 穂別町立博物館研究報告, 15, p. 17-51.
- HIRAYAMA, REN and CHITOKU, TSUTOMU, 1996. Family Dermochelyidae (Superfamily Chelonioidae) from the Upper Cretaceous of North Japan. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S., No., 184, p. 597-622.
- 平山 廉・川上 源太郎・紀藤典夫・地徳 力・櫻井和彦, 1999. 北海道穂別町の上白亜系より産出した大型陸生カメ類. 日本古生物学会例会(札幌)講演要旨.
- ICHISHIMA, HIROTO, 1994. A new fossil kentriodontid dolphin (Cetacea; Kentriodontidae) from the Middle Miocene Takinoue Formation, Hokkaido, Japan. The Island Arc, 3, p. 473-485.
- 木村 方一, 1985. 北海道穂別町産テスモスチルスについて(第2報). 穂別町立博物館研究報告, 2, p. 51-62.
- 久家直之, 1984. 北海道勇払郡穂別町産の長頸竜化石にともなう板鰐類化石について. 穂別町立博物館研究報告, 1, p. 33-36.
- MATSUMOTO, Tatsuro, 1989. A gigantic ammonite from Hobetsu, Hokkaido. 穂別町立博物館研究報告, 5, p. 1-11.
- MATSUMOTO, Tatsuro and TOSHIMITSU, Seiichi, 1995. Restudy of *Gaudryceras venustum* Matsumoto from the Hobetsu district, Hokkaido. (Studies of the Cretaceous ammonites from Hokkaido-LXXV). 穂別町立博物館研究報告, 11, p. 1-16.
- MATSUMOTO, Tatsuro, TOSHIMITSU, Seiichi and NODA, Masayuki, 1993. On a Maastrichtian (Cretaceous) inoceramid species *Sphenoceras heltonianus* (Matsumoto) from the hobetsu district, Hokkaido. 穂別町立博物館研究報告, 9, p. 1-20.
- NAKAYA, Hideo, 1989. Upper Cretaceous Elasmosaurid (REPTILEA, PLESIOSAURIA) from Hobetsu, Hokkaido, Northern Japan. Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S., No. 154, p. 96-116.
- 仲谷英夫・久家直之, 1984. 大型化石の模型製法について-穂別町産長頸竜化石の経験から-. 穂別町立博物館研究報告, 1, p. 41-46.
- 櫻井和彦・地徳 力, 1998. 北海道穂別地域のイギリス海岸. 日本地質学会第105年学術大会(松本)講演要旨, p. 299.
- 櫻井和彦・地徳 力・渋谷直憲, 1999. 北海道穂別町から産出した *Mosasaurus* (爬虫綱, モササウルス科) の一新種. 穂別町立博物館研究報告, 15, p. 53-66.
- 櫻井和彦, 1999. 穂別地域から産出した滄龍化石. 日本地質学会第106年学術大会(名古屋)講演要旨, p. 47.
- 鈴木 茂, 1985a. 中央北海道南部の上白亜系産モササウルス化石について. 穂別町立博物館研究報告, 2, p. 31-42.
- 利光誠一, 1994. 北海道穂別町稲里地域の白亜系中部より産出した生痕化石 *Zoophycos* 及び *Chondrites* について. 穂別町立博物館研究報告, 10, p. 27-33.

櫻井和彦, 2000, 小規模博物館学芸員の業務内容の実際 - 穂別町立博物館における 1998-1999 年度の実例 -. 穂別町立博物館研究報告, 16, 9-28.

Kazuhiko SAKURAI, 2000, The reality of the work of "GAKUGEI-IN" in a small museum - A case study of Hobetsu Museum between 1998 and 1999 -. *The Bulletin of the Hobetsu Museum*, 16, 9-28.

(要旨)

穂別町立博物館は、北海道中央部に位置する穂別地域から豊富に産出する主として中生代の海棲脊椎動物化石および海棲軟体動物化石を通じて、穂別地域の地史を紹介する自然史博物館である。

1998年度と1999年度の博物館の業務内容を比較すると、1999年度は「普及・教育」に重点が置かれ、その反動として「収集・保存」、「調査・研究」はほとんど行われていない。その原因として、学芸員の減員と、それにも関わらず普及行事を積極的に受け入れた点が挙げられる。

様々な面から制約を受ける小規模博物館は、その活動の方向を絞りこむ必要がある。穂別町立博物館は、今後とも、穂別地域から産出する動物化石を通じ、「ここにしかない博物館」を目指し、全世界へ発信できる博物館を目指す。そして何よりも「地域住民にとって愛着のある博物館」を目指していく。